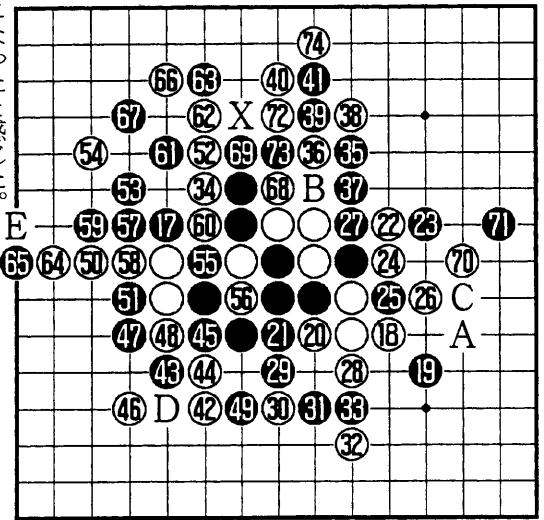


最終譜 (18~74)



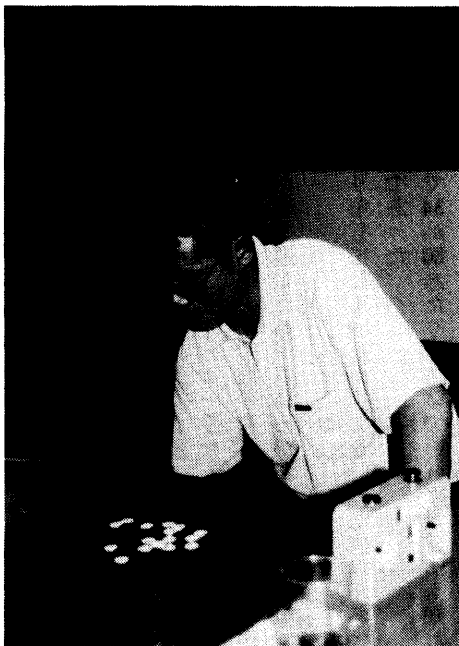
面になったと感じた。

黒53に対し、白54が問題の一着であった。黒55から「55 57 E 64」の四追い勝ちがある。だから白54では57に先着してから54でなければならなかった。あるいは白55 57 62 73と強攻していれば必勝だろう。白54を打った瞬間に57の打ち忘れを知った。

秒ヨミに追われて西園さんは55、57、59と打ち進んだ。E 64の勝ちを確認しているのだろうと思っていた私は、白54の手順前後を悔みながら、投了の準備をしていた。が、黒Eの

白42ではD、43あたり残り時間が切れる。よってのヨミの打ち切り。白50 52の好展開によって白に負けのない局

時でも遅くないと思ひ直し、次の一手を待った。黒61からE 64で四三勝ちである。が、黒61にヒかれてきたのには私もおどろいたが、西園さんにも「上辺を消せば」といった錯覚があったようだ。虎口を脱した。黒67はXの方から防がれていたら、盤端でもあり、勝ちは出なかったろう。簡単な四追い勝ちを逸した動揺が着手を誤らせたのだろうか。次局の対松浦浩六段は白番、嵐月で満局。今期はこの二局で燃え尽きてしまった。



対局中の三森九段

# 第29期名人戦A級リーグ

## ペンが重い！

### 自戦記 九段 三森 政男

奈良編集長の再三の催促を受けて自戦記を書くハメになってしまった。そもそも自戦記は勝局に対して書く、いわば自慢記であって、初期の頃はそんな約束でスタートしたように記憶している。従って、もし全敗であればあれこれ自省の記になってしまふので見苦しいし、読者にも失礼の極みであるので書かなくてよし...といった配慮があったと思うが...

自戦記を書くのが辛く苦しくなったのはいつ頃からだろうか。第14期(昭和51年)に奈良秀樹五段、磯貝江月八段に勝ち、西村敏雄九段に満局、そして磯部恭三九段、久家彰夫五段、西山厚五段、石谷信一六段に敗れて二勝四敗一分。さらに第20期(昭和57年)には松浦浩四段、奥村豊彦五段、山口一久五段に勝ち、西山厚八段、小塚和人七段、早川光勝八段、高橋久六段、西村敏雄九段、石谷信一七段に敗れての三勝六敗とダブルスコアの惨敗を喫してから、ペンが重くなってしまうようだ。

思えば第2期(昭和38年)の東日本リーグで技を競った新井華石八段、田波旭山八段、森田春月六段は既に鬼籍に入り、後半の合同リーグ戦でも佐々木昭祀八段、早川幸宏七段は休珠、健在なのは西村敏雄八段(現・九段)ただ一人という状況から思えば、まだ「名人戦」に出られるだけでも幸せなのかも知れない。

それにしても、若手の台頭が見られないのは遺憾である。この名人戦だけに限っても第4期の柴田雅充五段、安部洋昭五段、第5期の東島義隆五段、第6期の手島照男六段、第7期の綱川尚宏二段、第8期の片岡光昭五段、西田敏生四段、第10期中島英俊五段、吉田清二三段、第11期の蓮尾克彦五段、第14期の久家彰夫五段、第20期の小塚和人七段、高橋久六段等の前途を嘱望された諸君の活躍が聞かれないのは寂しい。まだフケ込む年代ではない筈だがどうしたのだろうか。実戦界の俊英たちの復活を心から願ってやまない。

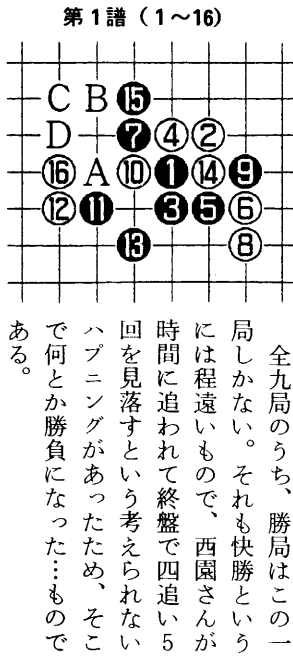


今期の出場権を得られたのは僥倖だった。一次予選で同点決勝となり、それも完敗といってよい形勢から相手のミスに救われて何とか持ちこたえて逆転勝ち。二次予選でも急な欠場者が出て三人リーグ戦となり、僅か一勝でA級リーグへの切符を手にすることができた。こんなことは名人戦29年のうち、初体験であった。

9月13日、台風の接近中に会場である名古屋へ一人で向かった。すでに台風の後波で、東京近辺も風雨が強く、新幹線の運行が気づかわれたが、遅れもなく無事到着。そして雨の中、会場の「愛知県青年会館」へタクシーを飛ばした。

9月14日、いよいよ対局の開始である。開始に先だって、東京国際大会の実行副委員長として、このリーグ戦の上位三名を大会に招待する旨の案内をした。

◇第1日第2局  
○74にて黒投了  
白 九段 三森 政男  
西園 典生



全九局のうち、勝局はこの一局しかない。それも快勝というには程遠いもので、西園さんが時間に追われて終盤で四追い5回を見落すという考えられないハプニングがあったため、そこで何とか勝負になった…ものである。

このところ、対局に際しては特に作戦はない。今回も同様ですべて相手まかせだ。黒を持って勝てるような作戦の研究もないから、白を持って相手について行くだけ。それも昔の経験をもとにしているのだが、近年は変化のスピードが速くてとても対応できない。

また、精一杯頑張っている気でも、緊張は続かないし気迫もなえてしまう。今回はことに三日前に国際大会の打ち合せ、そしてほぼ一ヵ月後に大会の開催。それに伴う盤、石、時計の心配等が山積していて、全力を集中するには条件が良くなかった。仮りに、全てが満足されていたところで優勝できるチャンスは皆無。私は名人戦を年に一度の「国内親善大会」と思っているから、勝敗にはあまり関心が無くなってしまった。全国の主だった方達と珠界を語れるだけで満足だ。

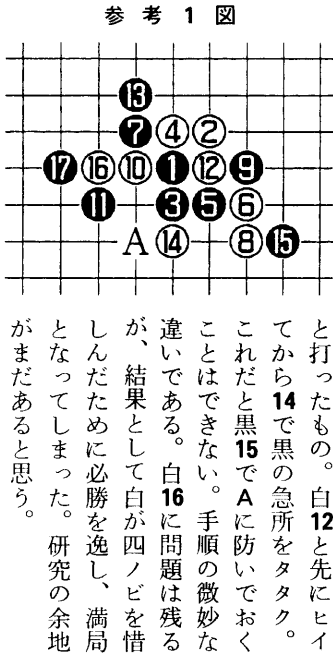
さて局面。銀月の黒5に白6では7にヒクのが一般的だが、一般的であるが故に私は打たない。それは他の人に委せておけば良い。かつて新聞に実戦譜が載っていた時、誰が打っても長星、瑞星、松月などであった。連珠の定石はある一定、それも終盤直前まで変化がないから、いわゆるシロウトが見たらまた同じ局面だ…と興味も半減することだろう。そこで、なるべく同一の局面が出ないように対局規定に工夫をこらして変化を持たせたものだ。近年、三珠交替打ちになって勝敗の均衡は取れているようであるが、実戦に現れる局面としては圧倒的に斜月が多く、難解であるが故にシロウト受けがし

ない。もしかまた何かの新聞等に実戦譜が載るようなことがあった時に(そうあるべきだと思いが…)この問題が再び論じられるのであろうか。

白6と打てば黒11までは定石。そして白16まで。白としては黒の次手に勝負を賭けているわけである。簡単に追詰めがありそうだがそうはいかない。実はこの局面、二週間前の9月1日の関東選手権戦で中村茂名人と打った。彼は黒17をAにミセ、白B止め。その後は下辺で華麗な追詰めとなったが、その時の研究で白Bではなく、いったん白C、黒Dと交換してからB止めなら追詰めは難しい…ということになった。それを思い出している白16までとなったのである。

しかしそこに至るまでも、私なりに実戦例がある。

左図は91年3月、第二回・連珠世界選手権戦への代表選手選考大会が京都で行なわれたが、その時に山口真琴五段(黒)



と打ったもの。白12と先にヒイてから14で黒の急所をタタク。これだと黒15でAに防いでおくことはできない。手順の微妙な違いである。白16に問題は残るが、結果として白が四ノビを惜しんだために必勝を逸し、満局となってしまう。研究の余地がまだあると思う。



問題がありそうだが、結果として白の勝ちとなった。が、短時間の勝負だったので逸したが、追詰めがあった、とは後で聞いた。

大分、遠まわりをしてみました。が、こういった伏線があったの、対西園戦であった。

黒17には白18で34か60あたりに防いでいけば無難かも知れない。が、それでは白1820の石のメンツが立たない。追詰め負けになるかも知れないが、ここは攻めて行くべきところと思いついた。白26に黒27をAだと白Bか36がイヤ味である。黒27に防がれて白28以下は黒の勝ち筋の消しであって、勝つための攻めではない。白34に手を戻し、黒の応手を聞いた。その前に白Cと打ってさらに攻めを続行しようかとも思ったが、僅かに及ばない。それを含みにしての白34で、矛を収めたのである。黒35からは4245と転じられるのも気がかりではあったが、何とかシノげそうである。